

機関番号：23901

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720199

研究課題名（和文）カトリシズムと政治的近代化—「知性主義の逆説」の政治史的・思想史的検証

研究課題名（英文）Catholicism and Political Modernisation.

“Paradox of Intellectualism” in the Political History of Europe

研究代表者

今野 元 (KONNO HAJIME)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：60444949

研究成果の概要（和文）：本研究は、近現代の政治的主流を為す知性主義と対決したカトリシズム勢力に注目し、三つの対象を選択して実証的に探究するものである。第一は、プロイセン王国の貴族院議員、ポーゼン城代で、教皇庁とドイツ帝国指導部、ドイツ人とポーランド人とを架橋しようとしたボグダン・フォン・フッテン＝チャプスキ伯爵、第二は、数百年ぶりのドイツ人教皇として2005年に着座し、第二ヴァチカン公会議以降の改革を再検討して、知性主義の批判を一身に浴びているベネディクトゥス六世（ヨーゼフ・ラッツィンガー）、第三は、「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」最後の宰相（マインツ大司教）でありながら、「フランス人の皇帝」ナポレオン一世に感激してライン同盟の「首席司教侯」となった啓蒙主義知識人カール・テオドル・フォン・ダールベルク帝国男爵である。第一のフッテン＝チャプスキに関しては、単著『多民族国家プロイセンの夢——「青の国際派」とヨーロッパ秩序』（名古屋大学出版会、2009年）を得た。第二のラッツィンガーに関しては、口頭報告「近現代ドイツにおけるカトリック教会と多文化共生——教皇ベネディクトゥス六世のキリスト教的ヨーロッパ論」を得たほか、査読付論文「教皇ベネディクトゥス六世の闘争——キリスト教的ヨーロッパのための「二正面作戦」」（『ドイツ研究』所収）を得た。第三のダールベルクに関しては、現在史料収集を継続中で、徐々に成果をまとめつつある。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to describe the life and ideas of three German Catholic leaders and present a clear vision of the confrontations between the Catholicism and its intellectual critics in modern and contemporary Europe. The first subject of investigation, Bogdan Count von Hutten-Czapski (1851-1937), was a Polish-Prussian aristocrat in the German Empire, who supported the premodern Prussian patriotism and monarchy, while confronting with the modern German or Polish nationalism and democracy. My work “The Dream of a Multinational Prussia. The Blue Internationals and the Order of Europe”, a biography of Hutten-Czapski, has already been published (The Nagoya University Press, 2009). The second subject, Pope Benedict XVI (Joseph Ratzinger: 1927-), is one of today’s leaders of European Conservatism and heads the reconsideration of the Second Vatican Council, which intended to reform the Eurocentric and anti-intellectual nature of the Catholic Church. Benedict’s ideas and struggles against the intellectuals in the world are discussed in detail in my paper “Pope Benedict’s Fight” (Bulletin of the Society of German Studies in Japan, 2011). The third subject, Prince Archbishop Carl-Theodor Baron von Dalberg (1744-1817), cooperated in spite of his status as German Chancellor of the Holy Roman Empire intimately with Napoleon, the Emperor of the revolutionary France, and was therefore criticised posthumously by German Nationalists in the 19th century as a traitor of the country. A biography of Dalberg is now in progress.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：カトリシズム／ドイツ／ヨーロッパ／知性主義／ナショナリズム／プロイセン愛国主義／フッテン＝チャプスキ／ダールベルク／ラッツィンガー／ベネディクトゥス一六世

1. 研究開始当初の背景

本研究の出発点となったのは、筆者のヴェーバー研究である。筆者は、『マックス・ヴェーバーとポーランド問題』（東京大学出版会、2003年）、『マックス・ヴェーバー』（東京大学出版会、2007年）、『少年期ヴェーバー古代・中世史論』（岩波書店、2009年）などの執筆・編集を通じて、「文化的プロテスタンティズム」や自由主義党派のような知性主義的潮流が、近代ドイツにおいてカトリシズムやポーランド人など「反知性的」と思われた集団や人々に厳しい批判を加えていたという現象を意識するようになり、「知性主義の逆説」という仮説を提示するに到った。これは、自由、平等、民主主義といった政治理念を生み出した知性主義が、主観的に平等な人間社会の形成を目指しているつもりでも、客観的にみると知性を基準にした人間の階層秩序を作り上げてしまっているという自己矛盾を指摘したものであった。

2. 研究の目的

この研究の目的は、従来はあまり関心を持たれないか、皮相的にしか論じられてこなかった反知性主義的な政治潮流、その代表例としてのカトリシズムの世界に敢えて焦点を当て、ドイツあるいはヨーロッパの近現代史像を豊かにすることにあった。保守勢力側の視点から歴史を読み解くという本研究の手法は、伊東冬美『フランス大革命に抗して』（中央公論社、1985年）や、長尾龍一『日本憲法思想史』（講談社、1996年）からも影響を受けている。これまで近現代の政治史は、概して知性主義的政治理念の発展を肯定する立場で書かれており、そういった先行研究から距離を置くことで、筆者は歴史をより多面的に見たいと考えたのである。自由主

義・社会主義政党・政治家や労働運動が過去半世紀の政治史研究の主要な論点であったのに対し、保守勢力、とりわけカトリック教会やその関係者はまだ研究が手薄であり、一面的な評価も垣間見えるので、この領域を深く探求することで、従来とは異なる歴史像が提示できると筆者は確信したのである。

3. 研究の方法

本研究は近現代におけるカトリシズムと知性主義との対抗関係を見る際に、三人の人物を分析対象として選定し、これを一次史料に基づき研究するという方法を選択した。

第一の対象は、ボグダン・フォン・フッテン＝チャプスキ伯爵（1851年－1937年）である。ポーランド系プロイセン貴族であるフッテン＝チャプスキは、教皇不可謬論を支持し、教皇庁での人脈や、ドイツ国内の体制派カトリック教徒（帝国宰相ホーエンローエ＝シリングスフルスト侯爵やプレスラウ侯爵司教コップなど）との人間関係を生かして、プロイセン王宮を始めとする各国中枢部と社会的関係を築き、ナショナリズムの激化に揺れるヨーロッパ国際政治をカトリック的・貴族的国際主義の立場から沈静化ないし架橋しようとした人物である。とりわけ彼は、教皇庁とビスマルクを架橋しての文化闘争の終息や、超民族的プロイセン愛国主義を掲げてのドイツ人・ポーランド人紛争の鎮静化に尽力している。フッテン＝チャプスキの政治的生涯を振り返ることは、ナショナリズムが渦巻く近代ヨーロッパで、貴族的国際主義（「青の国際派」の観念世界）がいかに消滅していったのかを見る企画となると思われた。

第二の分析対象は、ヨーゼフ・ラッツィンガー枢機卿、現教皇ベネディクトゥス一六世

(1927年一)である。教理省長官時代から「戦車枢機卿」として知られたラッツィンガーは、ヨーロッパの「キリスト教共同体」としての性格を重視する立場を打ち出してきた。それは、一方で「世俗化」の止め処ない進行によるヨーロッパ内部の道徳的退嬰への警告であり、他方で「文明の衝突」を意識したヨーロッパの歴史的連続性への固執である。ラッツィンガーの神学的、政治的認識を把握し、論敵のハーバーマスや緑の党ら「憲法愛国主義者」、「多文化主義者」、フーバー議長率いるプロテスタンティズム、新教皇の聖戦論批判に憤激するイスラム勢力、新教皇の歩み寄りに期待するコンスタンティノポリス総主教バルトロメオス、モスクワ総主教アレクシイ二世らの動向を見ることは、「多文化共生」の時代に将来を模索するカトリシズム、あるいはヨーロッパ保守主義思想の現在を分析することになるだろうと思われた。

第三の分析対象は、カール・テオドール・フォン・ダールベルク男爵(1744年—1817年)である。教権・帝権を両輪とする中世秩序の残滓であった神聖ローマ帝国最後の「帝国大宰相」(マインツ大司教)であり、ゲーテと交流する啓蒙主義知識人でもあったダールベルクは、フランス革命の理念を掲げるナポレオンのドイツ侵攻に直面し、自らライン同盟の盟主となることで、前近代的秩序と近代的秩序との融和を図ろうとした。ダールベルクの政治的生涯を、フランス革命という大変革を背景にして見ることは、カトリック教会と身分制を中核とする「旧体制」秩序が、いかに崩壊していったのかを分析する一つの試みとなるだろうと思われた。

4. 研究成果

三年間の研究を通じて、筆者は「知性主義の逆説」という仮説を実証するということろまでは到底行かなかったが、個別具体的な事例の研究を通じて、近代主義的批判に晒される前近代勢力の姿を従来になく鮮明に描くことができたと自負している。

第一のフッテン=チャプスキに関しては、単著書『多民族国家プロイセンの夢——「青の国際派」とヨーロッパ秩序』(名古屋大学出版会、2009年)を得た。この著作は、現地での一次史料収集に基づいて、前近代的なプロイセン愛国主義を標榜しつつも、しばしば近代的なナショナリズムへも傾斜するフッテン=チャプスキの揺れる心情を詳細に描いたもので、第19回名古屋大学出版会学術図書刊行助成(2008年)に選ばれた。

第二のラッツィンガーに関しては、口頭報告「近現代ドイツにおけるカトリック教会と多文化共生——教皇ベネディクトゥス一六世のキリスト教的ヨーロッパ論」を得たほか、

査読付論文「教皇ベネディクトゥス一六世の闘争——キリスト教的ヨーロッパのための「二正面作戦」」を得た。この報告、論文では、「理性」という概念を実用主義的に二様に用いながら、キリスト教共同体としてのヨーロッパの性格を保守しようとするベネディクトゥス一六世の基本構想を確認し、その言動が巻き起こした様々な紛争を概観した。

第三のダールベルクに関しては、残念ながら成果を科研費期間内には文章化ができなかった。本来は『史学雑誌』への投稿を予定していたが、遠大な計画であったため史料収集が途中で、成果もなお執筆中である。今後早期に内容を公表したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 今野元「教皇ベネディクトゥス一六世の闘争——キリスト教的ヨーロッパのための「二正面作戦」」、『ドイツ研究』第45号(2011年6月刊行予定)、査読有。

〔学会発表〕(計1件)

1. 今野元「近現代ドイツにおけるカトリック教会と多文化共生——教皇ベネディクトゥス一六世のキリスト教的ヨーロッパ論」(EUIインスティテュート関西・2011年1月29日・神戸大学六甲台キャンパス)

〔図書〕(計2件)

1. 今野元『多民族国家プロイセンの夢——「青の国際派」とヨーロッパ秩序』(名古屋大学出版会、2009年、366ページ)。
2. 今野元(編訳)『少年期ヴェーバー古代・中世史論』(岩波書店、2009年、169ページ)。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

http://www.aichi-pu.ac.jp/department_inroduction/foreign_studies/european_studies_germany_teacher_intro.html?ge-konnou

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今野 元 (KONNO HAJIME)

研究者番号：60444949

- (2) 研究分担者：なし
- (3) 連携研究者：なし